

## 真夜中のほうじ茶

〈福岡県〉  
米澤 泰子 よねざわ やすこ  
59歳

真夜中の病院の廊下に軽い足音がして、母と私のいる個室を軽くノックする音が聞こえた。

その日（正確にいうと前日になるが）21歳の私は、8時間におよぶ背骨の手術を受け、個室のベッドの上で苦しい手術第1日目を過ごしていた。手術そのものは順調に終わったのだが、若い人には極力輸血をしたくないという先生の方針で、ぎりぎりのところで輸血をしなかったために、猛烈な吐き気に襲われて私はベッドでぐったりしていた。まだ自己輸血の行われていなかった時代である。

ノックの音に、母がドアを開けるとその日の当直の看護師のWさんが入ってきた。Wさんは30歳前後

の落ち着いた物静かな感じのする人だった。彼女は点滴のパックを確かめ、私の脈をとり「苦しいけど、吐き気は1日か2日で必ず治まるから、もうちょっと辛抱してね」と言いながら私の手をギュッと握ってくれた。その手はやわらかく温かだった。

「こんな夜中まで来ていただいてありがとうございます」。母が深々と頭を下げた。Wさんは「私たちはこれから仮眠できるけれど、お母さんは一晩中眠れないでしょうか」と言いながら、良かったらと母に小さなお盆を差し出した。

お盆の上には、湯気の立つほうじ茶と小さなおまんじゅうが乗っていた。朝から緊張のし通しだった母

は、温かいほうじ茶を飲み、添えられたおまんじゅうを口にして、ようやく人心地がついたという。ほうじ茶の香りは、心配と疲れでへとへとになっていた母の心に、小さな元氣と勇気を運んでくれた。

「あのときは本当にうれしくて、Wさんの姿がナイチンゲールのように思えた」。母は後々までずっとそう言っていた。患者を見るだけでなく、付き添いの家族の不安や苦しみに寄り添い、それをさりげない形で和らげてくれたWさん……。一杯の温かいほうじ茶に込められた思いやりと優しさを、母も私も40年近くたつ今でも忘れたことはない。